

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2017.3 Vol.126



石巻での学習支援が終了(詳しくはP.15をご覧ください)

特集

松本大学・新村地区連携活動 若い力と発想で地域を元気に

～「プチ送迎ボランティア」が総務大臣賞受賞～

..... P.02

- 松本大学教育学部棟が完成 P.04
- そば粉とわさびのプロジェクト「もったいない大賞」最高賞 P.05
- 若者による平和の構築進む～松本ユース平和ネットワーク事業 P.06
- 卒業研究・卒業論文発表会／大学院修士論文発表会 P.08
- 第3回「あるぷすタウン」学生が運営 P.12 ほか

松本大学・新村地区連携活動 若い力と発想で地域を元気に

松本大学と新村地区が「地域づくりに関する連携協定」を締結してから1年がたちました。キャンパスがある地区をよりよくしていこうと、住民と教員・学生が、地域が抱える課題の解決に向けて一緒に取り組んでいます。このたび、学生も設立に関わった「プチ送迎ボランティア」が平成28年度「ふるさとづくり大賞」総務大臣賞を受賞しました。地区の団体、住民、大学が手を携えた活力ある新村の地域づくりの様子をご紹介します。

(観光ホスピタリティ学科 学科長・教授 尻無浜 博幸)

「地域づくりに関する連携協定」締結から1年 住みよい新村地区を一緒に考える

松本大学がある松本市新村地区は、人口3,300人、水田が広がり、カーネーションや蘭の花のハウスが点在する田園地帯です。また、ものぐさ太郎の伝承地でもあります。特定健診受診率は46.8%で松本市内35地区の中で第4位(平成25年度まとめ)であり、投票率が高いことや三世代同居が多いことも地区の特徴です。

昨年1月、本学はこの新村地区と「地域づくりに関する連携協定」を結び、大学が地区の地域づくりに本格的に関わらせていただくことになりました。具体的には、地区で創設した「あたらしの郷協議会」に設けられた4つの部会に、大学からも各々関係する教員らが関わり、一緒になって地域づくりを進めています。この4つの部会は、防災のことを考える「安全安心部会」、地域振興のことを考える「地域振興部会」、暮らしのことを考える「いきいき部会」、学びのことを考える「学びの友部会」です。住みよい新村地区にするために、大学と一緒に防災訓練を実施したり、高齢者や子ども達と交流をしています。



「できることもちよりワークショップ」の様子

この1年間は、協働してできることから取り組みました。その中の一つが、「できることもちよりワークショップ」の実施です。この事業は「誰一人取り残さない地域社会づくり研修プログラム開発事業」(主催:公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会)の一環で全国3カ所がトライアル研修として、中核都市(名古屋市的一般社団法人)・地方

都市(松本市新村地区)・中山間地域(富山県入善町のNPO法人)が取り組みました。新村地区は、大学と連携した地域づくりをテーマに約6カ月の時間をかけておこないました。

このワークショップを開催するには多くの準備が必要でしたが、全ての行程で大学と地域



ワークショップの準備風景

との協働で進めることができました。他の2カ所のワークショップの実施主体は、(専門家がいます)医療・福祉の専門機関が担いましたが、松本は専門家がない地区で受け持ったことになります。そうしたことから、このワークショップは地域基盤で開発された内容になっており、一番地域住民が関わるようになっていくのが特徴です。地域住民が自分たちの暮らしに責任をもって、複雑化する課題を解決する力をもつ道筋をつけるきっかけになったようです。



地区の指定避難場所に学生が駆けつけることを想定した昨年6月の合同防災訓練

学生が設立に関わった「プチ送迎ボランティア」 「ふるさとづくり大賞」総務大臣賞を受賞

新村地区で活動している「プチ送迎ボランティア」が、「ふるさとづくり大賞」総務大臣賞を受賞しました。全国各地でふるさとをより良くしようと頑張る団体、個人を総務大臣が表彰するもので、地区高齢者の外出時の「足」を確保するシステムを住民主体で立ち上げ、定着してきていることが評価されました。本学の学生も実態調査から協力しており、まさに地域密着の学びを生かした地域づくりが具現化されたものです。設立当時から尽力されている「プチ送迎ボランティア」の原田裕事務局長に寄稿いただきましたのでご紹介します。



松本大学、新村地区の皆様の協力に感謝

新村地区「プチ送迎ボランティア」事務局長(前新村公民館長) 原田 裕



新村地区の高齢者の通院や、買い物の送迎を地区住民で行う「プチ送迎ボランティア」が、平成28年度総務省「ふるさとづくり大賞」(総務大臣賞)を受賞しました。

この取り組みは、平成19年に商店「みすず屋」を拠点に行われていた松本大学生と地区のお年寄りの交流の中で、交通手段の話が出されたのがきっかけでした。学生と地区住民有志が高齢者を対象にアンケート調査を行い、その結果から、福祉に真剣に取り組むため「新村福祉システムネットワーク」

を立ち上げ、活動がスタートしました。活動を続ける中で、ドアtoドアの通院・買い物支援の必要性を特に感じ、平成24年11月、16名の会員で「プチ送迎」を始めました。

平成25年には学生の協力で、活動紹介のDVDを製作。文化祭等でPRし、会員拡大を図りました。今年で活動5年目を迎え、会員も80数名、運行回数560回、延べ利用者1,350名と確実に新村独自の活動として定着してきました。

このように色々な面でご協力いただいた松本大学及び地区の皆様にご場を借りてお礼申し上げます。大学には今後とも、新村の防災と福祉の取り組みの面でご協力をお願い致します。

住民主体の新たな構想も

「プチ送迎ボランティア」は週3回、地区住民が近隣のスーパーや医療機関へ高齢者の送迎をしています。昨年の8月で運行500回を達成したことを記念して9月に開いた講演会では、私が、自分たちの生活を自分たちで守ることの重要性和、それが「プチ送迎」にあらわれていることについてお話ししました。この組織は、60歳代～70歳代前半の人が「いずれ自分がお世話になるだろうから今のうちに手を貸しています」と言いながら支え、70歳代後半～80歳代の人



支えられる構造になっています。根底には、自分が生まれ育った場所に愛着があり、年齢を重ねても安心して暮らし続けたいという願いがあります。別に行政が運営するデマンド交通を重複する形で利用できるようなっていますが、住民の満足度はプチ送迎の方が高いようです。

さらに、地区の一部の方は、プチ送迎の次なる展開として、自分たちでグループホームをつくることはできないかと構想を練り始めています。介護事業を住民自治活動として行う発想です。他人任せ的にただ誘致するとか、行政に請願するのではなく、自分たちのことは自分たちでやる力強い動きを、新村地区の方々と接していると見てとれ



ます。元々長い歴史の中で地縁、血縁を基盤にした地区では、助け合い、声を掛け合って生活を重ねてきました。住民同士の姿勢を今の制度に組み込む新村地区の働きは、学ぶべきところが多いように感じます。

松本大学は地域密着の学びを基盤としています。また、学生の声をきっかけに、実際に奮起することができる、活力ある地区に存在しています。地元の地域に支えられているからこそ本物の学びができ、また、学生の若い力と発想が地域を元気にしているのです。

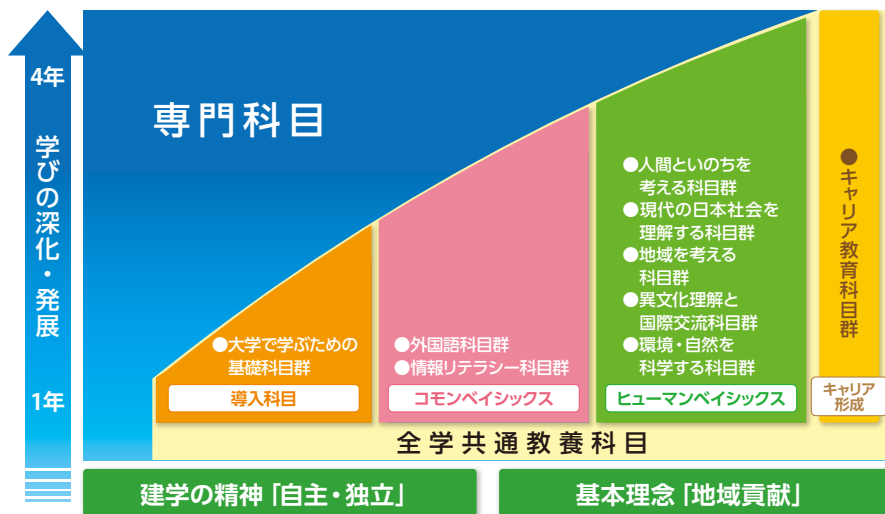
モジュール方式を採用した 新たな教養教育の展開

共通教養センター運営部会長 等々力 賢治

松本大学では4月より、多種多様な教養科目を分かりやすく4分野、9テーマからなるモジュール=科目群でくくって示した、新たな教養教育を全学的かつ共通に展開します。

従来は、各学部で学ぶ専門科目とは別にあるいは関連して、全学生が共通に学ぶべき科目及び内容を総じて教養教育と呼び、「導入科目」「ヒューマンベシックス」「コンペイシックス」の3分野で構成してきました。今回、それを基に、新たに「キャリア形成」分野を加えて4分野とし、そのうえで現代的な諸課題を複数のテーマからなるモジュールとして示しました。直面する諸課題を自らの力で切り開き生き抜くために、柔軟な発想と積極果敢な実践力が求められるとの認識に立って、各学生がより積極的に学修するよう促したいと考えたからです。

新たな教養教育を展開する背景には、経済・社会が著しくグローバル化する中で、人口減少と超少子高齢化に伴い、多くの地



方・地域が衰退の危機にあること、さらに、科学技術の発展が地球規模の環境問題や生命倫理にかかわる新たな課題を突きつけていることなど、今日的な状況認識があります。また、それが世界の共通言語としての英語学修の強化を必然化しているのは、あらためて述べるまでもないでしょう。

以上のような形で設けられた教養教育を通じて、学生が多面的に学問や社会問題にふれ、「より良く生きるとは」「次世代を担う社会人にふさわしいあり方とは」といったことについて学びを深め、有意義な学生生活を送るよう期待しています。

松本大学に新たな歴史を 教育学部棟が完成

大学事務局長 柴田 幸一



1月29日、松本大学教育学部棟(8号館)が竣工しました。平成27年12月17日に着工した8号館建設工事は、工事関係企業体の皆様のご尽力と近隣住民の皆様の温かなご理解をいただき、すこぶる順調に進み、4月からの新入生を待つばかりとなりました。

4階建の8号館は各種教室、教職支援センターや学生の学習室に加え、各フロアにラーニング・commonsコーナーも完備しています。学習室には、将来、真摯に子どもたちと向き合い、一生涯続ける教員になってほしいという願いを込めて、「教学半」(教うるは



ラーニング・commonsコーナー



8号館と一体化した第2体育館

学ぶの半ば)の孔子の言葉を掲げています。

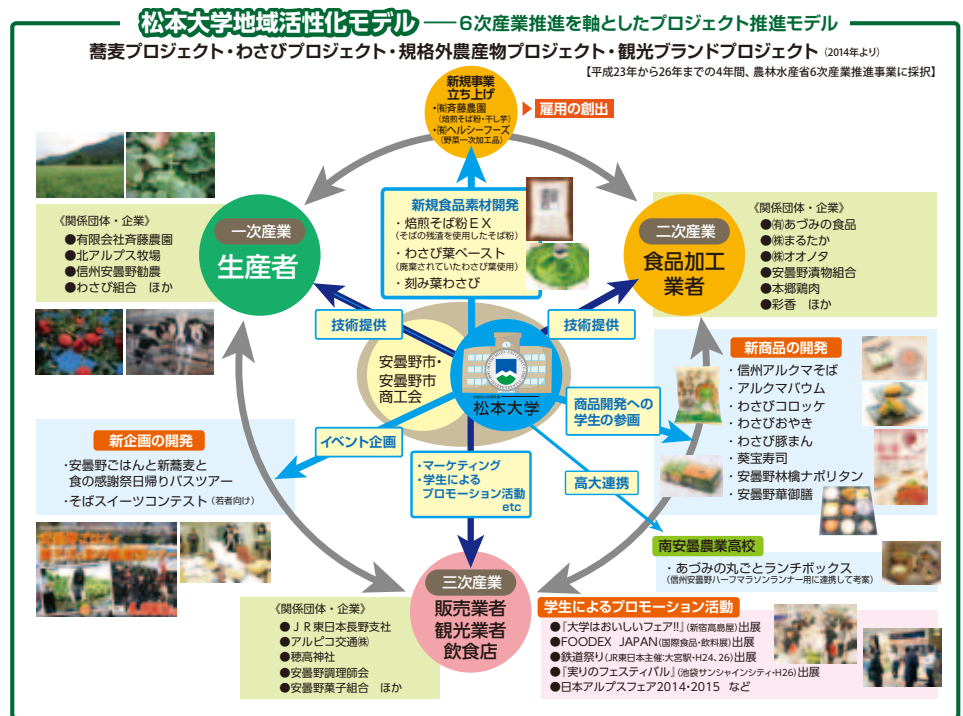
新たな施設の中で、教員を目指す若者の学ぶ意欲と、指導する教員の情熱が共鳴し、学生同士や学生と教員の間で、学問に対する夢とロマンが語られ、互いに学び学ばされながら、松本大学の新たな歴史の扉を開き、教育学部の未来を築いていくことを心から願っています。

そば粉とわさびのプロジェクト 「もったいない大賞」最高賞の農林水産大臣賞受賞

健康栄養学科 専任講師 矢内 和博

松本大学と、安曇野市内の商工団体などで行く「長野県中信地区6次産業推進協議会」のプロジェクトが、一般社団法人日本有機資源協会(JORA)主催の第4回「食品産業もったいない大賞」において、最高賞の農林水産大臣賞をいただきました。テーマは「そば粉とわさびのゼロミッションプロジェクトによる安曇野6次産業の推進」です。従来ならば廃棄される素材(そば製粉時に出る残りかすやワサビの葉)を活用した「信州アルクマそば」や「わさびおやき」などの商品を開発・流通させてきた取り組みが評価されました。

健康栄養学科矢内研究室が進めてきた研究活動は、今でいう地方創生を視野に入れたものであり、地域の素材を有効に活用し、利益を生む仕組みづくりでした。商品化したものは継続的に販売されるものにはなりません。よって、①食品素材の開発、②食品素材を利用した商品開発、③食品素材の大量生産システムの構築、④プロモーション活動、この4つを研究室として取り組むことに行きつきました。これらをモノづくりの仕組みとして地域に落とし込み、6次産業の観点から1次、2次、3次産業を大学や行政が中心となってコーディネートしていきました。「食品産業もったいない大賞」ではこれを「松本大学地



域活性化モデル」として発表しました。現在も、この仕組みづくりの一つひとつを学生の活動テーマとして取り組んでいます。

地域の皆様と活動する中で、「どうすればいいだろう」と考える機会を多く持ちます。学生は考えることが重要です。社会に出たときに、何でも分かる人ではなく、問題を解決する道筋を立て、それに向けて努力できる人であることが大事であり、大学ではそのような人材を育てたいと思っています。学生と朝

から晩まで粉まみれになってそば粉を製造し、水の冷たさに震えながらワサビを収穫したりと、その積み重ねが今回の受賞に結びついたと思っています。



留学生との交流を通じた双方向の学び

国際交流センター 續 美穂



松本大学では今年度、中国の嶺南師範学院から3名、韓国の東新大学から4名の交換留学生を迎えました。彼らにとっては母国での日本語学習成果を試し、さらに磨きをか

け、将来につなげるための志を持っての1年間の日本留学でした。

「交換留学生を受け入れ学内をグローバル化し、日本人学生にも国際意識を高めてもらう」という本学の目的は少しずつではありますが達成されています。留学生達は本学で熱心に学ぶ傍ら、国際交流クラブのメンバーや同じ授業の学生達とすぐに仲良くなり、一緒に食事に行ったり遊びにでかけたり、帰国前のお別れパーティーでは互いに号泣するほどの親密で温かな交流がありました。報道で見聞きす

る中国や韓国のイメージと、実際に友達になった目の前の留学生のイメージは随分違い、まさに「百聞は一見にしかず」でした。先入観やこれまでの体験から物事を決め付けるのではなく、自分の目で見て耳で聞いて話をした内容を信じるという当たり前の大切さを、留学生達が改めて教えてくれたように思います。

本学の学生もアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、中国、韓国等への交換留学や短期研修を通して海外での学びを深めています。一方、留学が困難な学生にとっても、このような交換留学生との交流は、異文化体験をする貴重な機会になっています。学生たちが視野を広げ、世界の様々な価値観や多様性に気づき、国際交流がますます活発化することを願っています。

「若者による平和の構築」進む 松本ユース平和ネットワーク事業が活動

観光ホスピタリティ学科 教授 尻無浜 博幸

「松本ユース平和ネットワーク事業」という取り組みが本学にあります。松本市からの働きかけで昨年5月から始まり、松本大学と信州大学の学生が一緒になって活動してきました。主旨は、若者によって「『平和を創るまち』松本」を目指す活動です。



ナガサキ・ユース代表团(長崎大学)と交流・情報交換

学生たちは昨年11

月、長崎市を訪問して同じような取り組みをすでに実施している長崎大学の学生と情報交換をおこないました。事業に取り組むメンバー自身の学びの機会としての訪問でした。その中で、大学生が長崎市内の子どもたちに平和教育と称した活動をおこなっていること、また核保有の現状を子どもたちに伝える工夫や被爆遺産の活用方法など、実際の場面を想定して学ぶことができました。

た。松本に戻って、自分たちで考える「平和とは」を明文化したり、全員で核に関する本の読み合わせをおこなったりしてきました。

最近では主に2つのことを計画して取り組みを始めています。1つは松本地域で学ぶ留学生と一緒に平和を考える企画、もう1つは松本市内の小中学校に平和の出前授業をする企画です。前者は信州大学が主に計画をたて、後者は松本大学が担当しています。

2月23日には早速、松本市立旭町中学校の平和教育授業に出向いて、修学旅行で広島に行く準備をしている2年生約120名に、長崎市を訪れた際に学んだことや、核兵器の恐ろしさを伝えました。このような活動を通じて、「若者による平和の構築の共有」を図っていきたくと議論しているところです。

平成29年度、松本市は平和推進課の設置を計画しています。この松本ユース平和ネットワークの取り組みを中心に進めていく構想で、若者による平和構築への大きな挑戦が始まろうとしています。



旭町中学校での出前授業

「住民主体の地域づくり」について考えあう まちづくり研究集会松本大会で事例紹介

観光ホスピタリティ学科 専任講師 向井 健

1月28日・29日、松本市内各所で「自治と協働のまちづくりを目指す研究集会松本大会」が開催されました。本集会は、松本市公民館70周年を記念し、従来から開催されてきた公民館研究集会を発展させる形で開催された、まちづくりに関する研究集会です。



市民活動商店街では松本市地域づくりインターンも出展

本学は、地域での教育・研究活動に取り組む中で、地区の公民館や福祉ひろばなどに関わることも数多くあることから、複数の教員が全体会のパネリスト・司会、分科会のコーディネーターなどといった本集会の中

核的な役割を担うことになり、討議を深めました。さらには、「自治と協働のまちづくり」の典型事例として、本学の教職員が携わってきたまちづくりの実践も数多く紹介しました。

集会の開催にあたっては1年余り準備を重ねてきました。全国からも大勢が訪れ、2

日間で延べ1,115名の参加がありました。松本市は地区内に配置された公民館や福祉ひろばを拠点として、地域住民が主体となったまちづくりを展開している地域として知られており、自治と協働のまちづくりに関心を持つ参加者からも注目されているようでした。

集会2日目には、松本市中央公民館(Mウイング)にて、市民活動の展示企画である「市民活動商店街」のブースが設けられました。市内7地区で松本市地域づくりインターンとして活躍する本学の卒業生(松本大学地域総合研究センター特別調査・研究員)も、各地区の特色や課題に応じた地域づくりの実践やコミュニティビジネスの立ち上げについてなど、これまでの活動を紹介しました。集会に参加した多くの人たちが、インターン生のパネルの前で足を止め、説明に耳を傾けていました。

学生が地域貢献活動の原点を再認識 本学で学生交流フォーラム開催

地域づくり考房『ゆめ』運営委員長 廣瀬 豊

12月3日に本学でCOC地域フォーラム「感じて」「動いて」「考え」ながら地域と関わる学生交流フォーラム『私たち学生は地域のために何をすべきか!』を開き、地域貢献活動に取り組む共愛学園前橋国際大学、田園調布学園大学、長野大学、松本短期大学、松本大学、松本大学松商短期大学部の学生38名が集まりました。

大学や学生による地域貢献活動は、地域が抱える課題を地域住民が主体的に解決できるよう支援することが重要です。しかし、学生が関わって完成した成果物(レシピや商品、イベントなど)に関心が向けられることが多いのが実情です。地域課題解決のための成果物ではなく、成果物そのもののバージョンアップや新たな成果物を生み出したいと活

動に参加する学生も多く、初期メンバーが卒業すると、本来の地域課題への関心が薄れていく傾向にあります。

このフォーラムでは、学生が地域に関わる意味についてワークショップを行い、学生の活動と地域課題との関連を見直しました。在学中に地域活動に取り組んでいたOG・OB、そして松本市で地域づくりインターンとして働く卒業生がファシリテーターを務め、学生時代に関わった地域活動の経験が社会でどのように活かされ

ているかなどのアドバイスをしながら進めました。他大学の活動や学生の考え方を知ること、現在の活動の悩みや課題を解決するためのヒントが得られるフォーラムになりました。

学生が地域と関わる時に、地域や住民を意識した活動となるよう振り返りや活動の原点を再確認する機会として、このようなフォーラムは大変意義のあるものだと考えています。



「バレンタインスイーツ 2017」 今年も大好評

観光ホスピタリティ学科 教授 大野 整

恒例となった本学主催の大学生と高校生の合同販売会「バレンタインスイーツ2017～バレンタインまで待てない～」を、2月11・12日の両日、山形村の「アイシティ21」で開催しま



した。当日は県内8高校の生徒、本学の3つのゼミ(観光ホスピタリティ学科向井ゼミ、健康栄養学科矢内ゼミ、松商短期大学部金子ゼミ)と「支援会ゆにまる」の学生、合計約80名が参加して各地域の特色を生かしたスイーツ28種類を販売しました。事前に広く周知されたこともあり、販売開始時間からお客様が売り場を囲むように集まり、担当の生徒や学生は終日忙しく動き回っていました。

有名メーカーの高級チョコレートとは一味違った、地元企業と連携した手作り感溢れるスイーツの販売は、年々変化するバレンタインの多様なニーズに応える人気イベントとして定着してきました。各スイーツに対するお客様の関心は非常に高く、農業高校として始めて参加した南安曇農業高校のフルーツケーキが初日に1時間あまりで売り切れたほか、参加各校の商品は2日目の閉店時にはほぼ完売となりました。

高齢者の食事 おいしく安全に 健康栄養学科特別講演会を開催

健康栄養学科 准教授 石原 三妃

1月21日に神奈川工科大学客員教授の大越ひろ氏を講師にお迎えして、健康栄養学科特別講演会「高齢者の食と美味しさ」を開催しました。超高齢化社会に突入している日本では、摂食・嚥下困難な人に提供する食事は、その摂食機能に応じたテクスチャーや嗜好性が重要となります。今回の講演会では、健康栄養学科の学生および外部からの申し込み者約280名が聴講しました。

講演では、おいしさの要因についての基本から、摂食機能が低下した高齢者の安全性の配慮について、食品のテクスチャーをコントロールする方法から、おいしさをデザインするための工夫まで、多岐にわたるお話をいただきました。学生は、高齢者と若年層の食機能や嗜好性の違い、食事を提供する時のポイントなどについて、メモを取りながら熱心に聴講していました。地域で活躍するために勉強している学生や、現在医療や介護の現場で勤務されている方にとって有益な講演内容でした。今回の学びをこれからの学生生活、将来の職場で生かしていってほしいと思います。



卒業研究・卒業論文発表会

大学4年間、短期大学部2年間の研究活動の成果を発表する「卒業研究・卒業論文発表会」が各学部、学科において行われました。

総合経営学部 総合経営学科

平成28年度卒業研究発表会を終えて

総合経営学科 学科長・教授 矢崎 久

平成28年度卒業研究発表会を2月8日に開催しました。社会という荒波に船を漕ぎ出すまでにたくましい成長を遂げた4年生19組29名の凛とした勇姿に感激し、3時間という時間がまるで束の間ほどに感じられました。



さて、今回の発表テーマは、国際市場環境、地域産業および企業、成功企業の経営分析、起業、道の駅を場とした多角的経営分析および商品開発などの連携実践、既存のハードウェアおよびソフトウェアの実用可能性、商品イメージとブランド力による売り上げの変化、コンビニエンスストアの経営戦略など、総合経営学科の、ほぼ全射程と言いつける内容に加えて、代理産の倫理的課題および現状と今後の課題に関する、学際的とも思われるものもあり、その内容も、まさに飽きることのない目を見張るものばかりでした。またパワーポイントの

出来も簡潔かつわかりやすいものでした。見事に成長した卒業生の皆さんにエールを送りたいと思います。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
宇治 親洋介 中谷 唯	葛西	TPP時代における日本農産物の輸出拡大戦略
澤野 千帆 高柳 唯 武田 梨那	葛西	日本における代理産に関する一考察
小島 恒太	室谷	パチスロの統計学
深澤 駿介 宮澤 朝野登	室谷	インターネットでどのように地域産業を支えるか
伊藤 翼	兼村	なぜダイバーシティ経営が業績向上につながるのか -信越電装・協和精工を事例に-
木島 信吾	兼村	なぜ高収益が生れるのか -ライト光機製作所・モキ製作所を事例に-
須澤 巧	兼村	なぜトップシェアは生まれるのか -泰成電機工業を事例に-
林 達也	兼村	なぜ連続黒字経営が可能なのか -高橋製作所を例に-
島田 電輔	兼村	なぜ新市場参入は成功したのか -シナノ・日本ハルコンを事例に-
アルズグリスン	室谷	日本におけるハラルについて
阿部 愛 上野 佳奈恵	清水	道の駅中条をインバウンド観光の拠点へ
蔵谷 卓也	清水	道の駅におけるオリジナル商品の特徴 -長野県内7ヶ所の道の駅への調査をもとに-
浅野 瑞生 平林 佑規	清水	観光客から見る松本城の姿 -松本城おもてなし武将隊の体験と調査より-
原口 太郎	清水	創業計画書 -もしも自分がお店を開くとしたら-
山岸 卓真	室谷	3Dプリンターの可能性を考える
佐藤 俊	室谷	学習機能を組み込んだじゃんけんマシン
海老原 佑輔 小幡 柊人 香山 健	室谷	Kinect v2 を用いた笑顔認証
入山 有紗 酒井 祥子	清水	同一ブランド内の商品比較
佐野 幹仁 町田 海輝	葛西	セブン・イレブンの商品開発と競争戦略 -ドーナツ業界を中心として-

総合経営学部 観光ホスピタリティ学科

意欲的な研究発表が出そろった

総合経営学部教務委員 専任講師 向井 健

2月8日、観光ホスピタリティ学科の卒業研究発表会が行われました。4年間の学びの集大成として、6つの研究室から11本の発表がありました。



今年度における卒業研究発表会は、現カリキュラムが実施されてから初めてのものでした。例年と比べても、質の高い意欲的な発表が出揃ったと感じました。先行研究や資料を読み込み、研究上の問いが立てられ、課題の探求がされていました。

また、本学科での学びを反映して、研究内容や方法には、バリエーションのある発表が並びました。それと同時に、互いの研究が重なりをもち

ながら、豊かに深め合っていく関係になっていると感じました。他のゼミの発表を聴く事を通して、新たな発見もあったのではないのでしょうか。

卒業研究を執筆した4年生は、研究をすることの「難しさ」とともに、その「醍醐味」も味わったのではないかと思います。研究活動を通して得た「問い」を大事にしながら、それぞれの道を拓いてほしいです。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
赤沼 由衣 浦野 泰希 小作 明音 倉沢 綾子	齋藤 翼 曾根原 理華 百瀬 祥真	山根 松本広域における観光連携の推進に関する研究
関口 遼太 高島 稔	田中 奈津美 玉井 実花	益山 クオリティサービスの事例研究1
竹内 桃子 羽入田 佳奈	碓井 萌水	益山 クオリティサービスの事例研究2
小西 夏子		木村 史料から読み取る近世日本の旅
上條 あゆみ		木村 近世の婚礼における地域性
富澤 公輔		木村 藩財政の地域比較 -松本藩と宮津藩の家田団練禄-
小池 峻生 古岩井 遥	近藤 文佳	畑井 若者の地域愛着に関する研究
奥原 光駿 小山 桃世	廣瀬 遥	畑井 大学生の幸福度の規定要因と地域定着との結びつき
中新井 佑美 小林 克紀	根井 梓	白戸 居場所を通じた地域の構築 -サードプレイスの可能性
中島 麻衣 金子 綾花 宮下 優奈 鹿田 知暉 大塚 勝信	高橋 一貴 柏原 嘉人 宮下 遼太郎 竹内 杏樹	白戸 居場所づくりの現状と課題 ~地域における実践活動を通じて
吉田 未菜子 立花 さくら 小山 由莉	長村 紋 清水 泰志 寺島 国彦	尻無浜 生活困窮者自立支援法」における地域実践の取組み -N団地町会での実践事例-

「食と健康」をテーマに多彩な研究を展開

人間健康学部教務委員 専任講師 矢内 和博



平成28年度卒業研究発表会が、12月17日に開催されました。□頭発表のテーマは14題、ポスター発表は昨年よりも12題多い46題となり、抄録の厚みが健康栄養学科の研究活動の多様さを物語っていました。また□頭発表での質疑応答の活発さや、ポスター発表の会場の熱気から、卒業研究に一生懸命取り組んだ学生の熱意を感じました。

3年生は来年度からの卒論テーマについて考える場として、2年生は研究室配属に向けたリアルな情報収集の場として真剣にポス

ターを見ていました。廣田直子学科長からは、様々な研究室とのコラボレーションをしてほしいとの講評があり、来年度ますます研究活動が盛んになり、健康栄養学科発の技術、知見、商品、企画などがもっと多く出てくることに期待が膨らみました。4年生は、卒業論文を通して、未知の課題に取り組み、様々な困難を乗り越えることができたと思います。この経験を社会で役立て、さらに成長していくことを願っています。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
小林 雅 高井 瑞季 西潟 巧太郎 依田 涼	沖嶋	災害時の食物アレルギー患者支援としてのバッククッキングの可能性
清水 優里 山田 知実	藤岡	介護食おやきの開発 ～長野県の郷土料理をおいしく味わう～
小林 愛実	木藤	漬物に含まれる植物乳酸菌の分離・同定と応用
鍋島 ひかり 前井 詩織 籠 果澄	進藤	随意収縮に伴う相反性は抑制の変化：上肢における検討
中井 ゆう	福島	メルヒェンに潜むカニバリズム
古田 ゆりの	矢内	安曇野産玄米粉を用いたアレルギー対応食品の開発
丸山 彩美	伊藤	食べ合わせについて
三鬼 由里江	山田	3T3-L1 脂肪細胞におけるインスリンとAICAR による SHARPs 遺伝子の発現制御
渡邊 愛美 林 桃子	呉 高木	新体操選手の骨密度と食事の影響 6-MSITC によるPEPCK 遺伝子の転写調節機構の解析
坂詰 麻由	廣田	高校硬式野球部選手を対象とした栄養サポートにおける牛乳・乳製品の活用
小嶋 利佳 原田 裕紀菜	成瀬	米の摂取に対する松大生の傾向と意識調査
小柳 円 竹村 萌 宮原 恒樹	杉山	身近な食品に含まれる放射性物質の存在量と安全性 II —きのこの放射生態学調査—
大島 明実 中澤 美鈴	石原	揚げ物調理中の音測定方法の検討

後輩たちに残す、4年間の集大成

人間健康学部教務委員 准教授 河野 史倫

12月24日にスポーツ健康学科の卒業研究発表会が開催され、20題の□頭発表と、70題のポスター発表が行われました。今年度は12月の実施ということで卒業論文の提出期限も例年に比べ早くなり、



大変な苦労だったと思います。発表会を通じて印象的だったのは、2・3年生からの質問の多さでした。4年生はこれに対して丁寧に研究の背景や持論を説明してくれましたし、質問した学生自身にも専門性を高めたいという意欲を感じました。ポスター発表でも、先輩を質問攻めにするような活発なシーンがあり、学術集会として見てもレベルの高いものでした。全ては4年生ひとりひとりの卒業研究への取り組みの成果だと思います。

子どもの発育や教育に関する研究が比較的多かったように感じました。これまでの学びの中で多くの学生が感じ取った、現代社会で重要視すべき課題なのでしょう。4年生が取り上げたテーマは、また3年生へ受け継がれ、今回では解決できなかった問題にもやがて答えを出してくれると期待しています。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
渡邊 美優	岩間	伸膝前転の指導方法に関する研究 —ロイター板と重ねマットを用いた練習方法の違い—
塚田 捷太	等々力	なぜ高校野球は人を惹きつけるのか —メディアが創りだす甲子園野球—
秋山 ひかる 赤池 裕貴	根本 犬飼	足指筋力及び浮き指が跳躍力に及ぼす影響 児童の投動作習得における遊びの活用とその効果
土屋 雅人	齊藤	GKによる一つのミスがチームの心理状態にどのような影響を与えるのか?
山口 奈菜	中島(弘)	幼児期における運動能力の差について —芝生の園庭と土の園庭を比較して—
中村 圭介	河野	運動歴の有無が不活動に対するヒラメ筋の応答性に及ぼす影響
飯高 穂乃花 安藤 直哉	岩間 中島(節)	体育の授業における子どもの学習意欲を高める言葉かけ 足型と運動の関係性について
宮島 優伍 上條 健宏	犬飼 江原	運動会「組体操」種目実施の是非を探る 大学生の怪我に関する調査
中澤 久美	根本	活動量計を利用したブルーピングサイトが 大学職員の身体活動量及び心理面に与える影響
三木 基裕	田邊	10kmマラソン記録推定における12分間走の有用性評価
小松 美月	等々力	部活動内でのいじめ問題の実態 —長野県M高校のバレー部を例に—
安江 怜 雪入 大輝	岩間 田邊	生徒が意欲的に取り組めるダンスの授業 脚長差が閉眼足踏み検査に及ぼす影響とその有用性について
瀧上 アユミ	中島(節)	集中力を向上させる環境デザイン
類沢 岳洋	根本	Mental Trainingが技術力向上におよぼす影響
篠崎 琳子	新井	日本の野球における男女平等に関する研究 —女子の参加機会に着目して—
平坂 雅李之	等々力	中央競馬の観客動員数と売上 —海外、地方との比較および中央競馬の変遷と経営戦略—

松商短期大学部

先輩の卒業研究発表を1年生も評価

松商短期大学部教務委員会主任 教授 矢野口 聡



1月25日、1年生のゼミの時間を使って2年生の卒業研究の成果を発表する会が催されました。2年生はすでに1月17日に卒業論文の提出が済んでおり、その中から発表を希望するゼミを募り、選ばれた7組が1年生に向けて成果を発表しました。

川島ゼミでは、スポーツブランド用品の人気の理由について、藤波ゼミではマーケティングにおける行動心理の有効性について発表しました。また、山添、金子、浜崎、矢野口の各ゼミは、先輩たちが残した成果を土台にして取り組んだ成果を、図表や写真、実演といった形で発表しました。

1年生には、各発表者のテーマやプレゼンの仕方などについて4段階の評価形式でアンケートに答えてもらいましたが、日本の学校制服を国際比較した中村ゼミの赤穂優伽・山崎穂乃香ペアの発表に高い評価をつけた学生が多かったようです。1年生には、この発表を参考にして来年度の卒業研究を頑張ってもらいたいです。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
池上 貴美	川島	どうして今スポーツブランドが人気なのか
笠原 唯 堀場 瑠海	金子	Product development of rice-balls
藤本 さつき	山添	東京ディズニーリゾートの損益分岐点分析
奥原 花音	藤波	マーケティングにおける行動心理の有効性
本元 明美	矢野口	スクラッチを用いたゲームプログラムの作成
赤穂 優伽 山崎 穂乃香	中村	日本の学校制服-世界の学校制服と比較して
大平 菜美加 矢口 紗也	浜崎	Flashを利用したWebコンテンツの作成

大学院修士論文審査発表会

鍛えられた論理的思考で
研究成果発表

大学院健康科学研究科 教授 根本 賢一

2月13日に健康科学研究科の修士論文審査発表会が開催されました。今年度は修了予定者の4名全員が人間健康学部出身でしたので、学部時代の卒業論文発表会の経験から緊張もないだろう?と思っておりましたが、審査会ということもあり、皆さん少々緊張していたようです。



研究内容は、社会的なものから分子生物学的な研究まで健康科学研究科の特徴をよく示したものであり、2年間の研究成果を分かりやすくまとめ

て発表していました。研究発表後は聴講者から多くの質問等が出されて、4つの演題すべてで設定時間を少々超過するほどでした。

4名の皆さんにとって、この2年間あるいは3年間(海外留学生は3年在籍)はいかがでしたか?良かったこともそうでなかったことも色々あると思いますが、大学院で鍛えられた論理的思考は必ず今後の生活において役立つと思います。いよいよこれからは本当のスタートです。ご活躍を大いに期待しています。

発表者	指導教員	論文タイトル
近藤 壮太	根本	中小企業の従業員に対する「健康経営」に関する意識調査 An Employee Awareness Survey of "Health and Productivity Management" in small and medium-sized Enterprises.
宮澤 武	福島	スポーツにおける「負け」の表象 -日本の新聞記事の分析を通じて- The representation of defeat in Sport : An analysis of Japanese newspaper articles
三島 歩美	山田	SHARP-2 と ATBF1 との相互作用の解析 Analysis of protein-protein interaction between SHARP-2 and ATBF1
柳澤 有希	山田	メラトニンによる糖新生酵素 PEPCK遺伝子の発現調節機構の解析 Analysis of regulatory mechanisms of the gluconeogenic PEPCK gene expression by melatonin

TOPICS ■ 卒業論文受理され安堵の表情

卒業論文は、各ゼミの教員への提出が基本ですが、スポーツ健康学科は教務課に提出することになっています。12月14・15日の2日間がその提出日で、教務課窓口は大変混み合いました。論文は、字数、行数、フォントなど指定された様式に合致しているか細かなチェックがなされます。受理されると、学生は肩の荷が降り、心から喜んでいる様子でした。それもそのはず、4年間の学修、研究の成果がこの卒業論文で、またこの論文の提出と受理で、ひとつの集大成を迎えるからです。皆さん、大変お疲れ様でした。(教務課長 丸山 勝弘)



研究室紹介

スポーツ健康学科 専任講師
田邊 愛子

運動はいつやるのが効果的？

田邊ゼミでは、介護付きマンション入居者への転倒予防運動教室から、中高齢者を対象とした筋力アップ教室、子どもの運動教室、そしてアスリートを対象とした測定まで、年間を通じて100回近くの実習を行っています。それら全ては、学生が主体となって企画書を提案し細かい指導案を作成していきます。こうした実習に行くと、学生がそれぞれの課題(知識の不足や伝えることの難しさなど)を持って帰ってきます。それによって学ぶ意欲と姿勢が大きく変化するのを経験しています。ある時、単回で行っている健康教室に担当学生が自身の祖母を連れてきました。他の学生たちとビックリしましたが、自分たちの活動に誇りを持ち、その地域で生活する祖母にも是非体験してもらいたいという思いから出た行動が微笑ましくもありました。最近では、企業向けの体操DVDの考案や、自治体からの依頼による体操番組を制作することも多くなり、活動の幅が広がっています。

さて、私の研究課題は「効果的な運動処方について」です。ヒトの身体活動量には季節変動があることが多く報告されており、一般的には夏期に比べて冬期に低下傾向を示します。冬に活動量が減少する理由は、寒い気温のせいで動きにくくなるなど皆さんも思い当たる節はあると思いますが、一方で、私の知る中高齢者の方々は真冬でも朝5時にウォーキングをされています。では、本当に活動量の多



い夏に運動をしているのでしょうか?また、夏に運動をする方が効果的なのでしょうか?日本の夏は暑く、1994年以降は熱中症での死者数は増加傾向にあります。真夏に運動を実施する際、その運動強度や産熱量、放射熱を計算し、体温調節反応で対応可能な範囲であるかを考慮しなければなりません。さらに、ヒトの気温に対する感受性は年代によって違います。効果的な運動方法について、とくに「いつやるのが効果的か」ということを研究課題としています。今後はこのような季節差を検討し、体育が必修ではなくなった大学授業の中で運動習慣を増加させるための取り組みをしたいと考えています。

信州大学大学院医学系研究科スポーツ医科学分野博士課程の後、2009年から現職。医科学修士。【専門分野】健康づくり・フィットネス・スポーツ医学【研究課題】効果的な運動処方について

》消費生活展に参加して

健康栄養学科 准教授 石原 三妃

10月21日、松本市あがたの森文化会館で行われた松本市消費生活展に、健康栄養学科3年生7名が参加しました。消費生活展は様々な団体が消費生活や環境問題などについて市民に発信する場であり、石原ゼミでは1期生から毎年、このイベントでデポジット容器を紹介するブースを担当しています。デポジットとは、ブースの来場者から預り金を受けて容器を渡し、容器が返却されたら預り金を返却するものです。毎年ゼミ生で検討して容器に入れる料理を決めていますが、今回は、季節感を重視した「きのこ汁」を提供しました。学生は初



めての学外でのイベント参加に向けて、何度も試作を重ね、改善案を話し合いながら準備をしました。

オープニングセレモニーでは、運営委員や来場者の前でデポジット容器の運用方法について寸劇を交えて説明しました。その後、

キャンパスを飛び出し
地域で学ぶ!

out campus study

アウトキャンパス・スタディ

220食分の「きのこ汁」を提供しました。当日は天気が良く、涼しい気候であったこともあり、アナウンスと同時に長い行列が出来、大勢の地域の皆様にきのこ汁を召し上がっていただくことが出来ました。多くの方に「おいしかった」と言っていただき、高評価のうちにイベントを終了することが出来ました。ブースに来場された地域の方や、他のブースを運営している方と交流することもできました。

参加した学生からは、「早い段階から準備することの大切さを今後の生活にも生かしていきたい」「仲間と協力してイベントを行うことが出来てよかった」「訪れた方と関わることが出来た」「木育などの他分野の方にお話を伺うことが出来て勉強になった」などの前向きな感想が寄せられ、多くの学びのあるアウトキャンパス・スタディとなりました。



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』



地域づくり考房「ゆめ」は、学生が大学での学びを活かして地域と連携し、課題解決に向けて主体的に活動することを支援しています。

子どもたちがつくりあげる街 「あるぷすタウン」学生が運営



2月18・19日に松本大学で、子どもたちがつくりあげる街「あるぷすタウン」を開催しました。今回で3回目を迎え、本学の学生23名が実行委員として昨年4月から準備を進めてきた企画です。当日は、2日間参加可能な小学4年生から中学生が230名参加し、中农信地区の高校生、本学の学生、専門家を含む社会人、総勢235名のボランティアがスタッフとして運営に携わりました。

「あるぷすタウン」では子どもたちが2日間、仕事をしてお金を稼ぎ、税金を納めます。そして稼いだお金で、アカデミーで学んだり雑貨を購入(消費)したりしながら街の仕組みを学びます。市長と議員選挙に立候補



した子どもは、松本市議会議員3名の協力により公約を考え発表し、選挙活動をしました。「町をきれいにすることや「楽しく遊べるブースを作りたい」など、街で過ごした経験がいかされた公約ができました。

実行委員のメンバーは、子どもたちが2日間この街で過ごすための仕事の内容や、お金の流通のルールなど、過去の反省やこれまで参加した子どもたちの意見や要望を取り入れるために何度も話し合いを重ねてきました。また「本物の仕事を体験してもらいたい」という目的のために、専門家ブースに協力いただく企業30社、お金を消費する

アカデミーブース8社と調整し、仕事内容や体験の打ち合わせをしてきました。

子どもたちのメッセージを集めた「あるぷすの木」には、「今回で3回目だけど来年も参加したい」「いろんな仕事の体験ができて楽しかった」などたくさんの声が集まっています。参加した子どもたちにも、運営してきた学生にも多くの学習の機会となるこの企画をこれからも続けていきたいと考えています。最後に、協力いただいた企業の皆様、ボランティアとして活動いただいた皆様、本当にありがとうございました。

(地域づくり考房「ゆめ」運営委員長 廣瀬 豊)



「みすず屋」で 地域の方との交流が復活!

松本大学のすぐ近くに、昭和の趣を残す「みすず屋」というお店があり、地域の方と学生が多世代の交流を目指して活動しています。

2007年5月より7年間、お店をお借りして、地産地消をテーマに学生の学びや経験を活かし地域の方々との交流する活動が続きましたが、その後しばらく交流が途絶えていました。しかし、学生が新村地域でのボランティア活動に積極的に携わるなかで、昨年5月より観光ホスピタリティ学科4年の中田馨さんが「みすず屋」でボランティアを始めて



交流が復活。後期には後継者となる学生が増えて3人での活動となりました。

学生達は、来てくださる地域の方にもっと交流を楽しんで欲しいと考え、11月は以前読んだ本の感想を発表する「読書会」を開催しました。手作りのお菓子を持参し、お茶を飲

みながら普段話さない内容や思い出に残るエピソードを語り合う楽しい会になりました。12月はオーナーからの要望でクリスマス会を開催。参加者一人ひとりにメッセージ付プレゼントを用意し、都道府県ビンゴゲームやエビカニクス体操などを企画しました。参加した方からは「久しぶりに頭と体を動かして楽しかった」と感謝の声があがりました。春休み前には毎回の活動内容を書いたノートに参加者全員にあてた感謝のメッセージを添えてお店に届け、今年度を締めくくりました。

これからも地域づくり考房「ゆめ」は学生の想いをカタチに変える、楽しい地域づくり活動の応援をしていきたいと思っています。

(地域づくり考房「ゆめ」 浅川 三枝子)

その他の活動については、[地域づくり考房「ゆめ」のホームページ](#)をご覧ください。

地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション



地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動をご紹介します。

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美
健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

卒後フォローアップ研修会・COC+講演会を開催しました

地域健康支援ステーションでは地域の健康づくりを支援するために、「食育」「身体活動」といった分野から、健康づくりを推進する人材の育成と各現場で活躍する卒業生のフォローアップを目的とした研修会を毎年開催しています。これまでに、やる気にさせる訓話・勇気を与える感動のスピーチ「ペップトーク」や、自分の魅力を引き出す声の出し方、声とメンタルの関係について研究されている講師などをお招きし、これから就職する学生、すでに社会人として活躍している卒業生や一般の方にも役立つテーマの研修会を実施してきました。

今年度は2月21日に本学で、長野県松本保健福祉事務所・松本地域食を育む連絡会議・本学健康栄養学科との共催による「食を

育むつどい」として開催し、松本地域の食育や健康づくり活動に取り組む関係機関、団体、住民、本学学生・卒業生も一堂に会し、活動の紹介や情報交換、交流会を行いました。

地域で推進されている食育の実践活動の事例発表、ステーションの健康運動指導士スタッフによる、体をほぐすストレッチや、家事をしながらできる筋トレ例などの紹介もありました。

活動交流会では、健康栄養学科矢内研究室と長野県中信地区6次産業推進協議会の「ゼロミッションプロジェクト」で商品化された食品の展示販売、農村女性の会やJA塩尻市女性部などによる農産物・加工品の販売もあり、活気にあふれた交流が行われました。

群馬大学名誉教授の高橋久仁子先生による「食べ物情報」ウソ・ホント「健康食品」



で健康が買えますか?〜と題した講演では、メディア等の行き過ぎた食情報を見極め、正しい食物の知識を身につける重要性を伝えていただきました。参加者からは、「食は生きるためには欠かせないもの、喜び、幸せ等すべてを育むものと改めて考える機会になった」「今後もメディアリテラシーを考ながら自己責任で口に入るものを判断していきたい」などの感想をいただきました。

食育フォーラムで、味噌汁の味比べを行いました

1月14日に茅野市で開催された食育フォーラムにおいて、味噌汁の味比べコーナーを担当しました。「昆布と鰹節」「煮干し」「顆



粒だし」「野菜を煮出しただし」「干しいたけ」のだし汁をベースにそれぞれ塩分濃度0.8%に調整した味噌汁を並べ、来場者にそれぞれ飲み比べていただき、だしの種類を当てるクイズを実施しました。日ごろ濃い味の料理に慣れていると微妙な味の感覚が鈍くなる場合があります。参加者のうち全問正解者は半数にも満たない状況で、特に「昆布と鰹節だし」とカツオ風味の「顆粒だし」の違いに悩む方が多く見受けられました。「だし汁を飲み比べするという体験は初めてだったけれど、結構難しい」「日ごろから味に気を使っているので、全問正解して嬉しい」などの感想が聞かれました。

大人気! 体力測定と食事診断

大学での専門的な機器を使った体力測定やSAT(自動食事評価システム)での食事診断が口コミで評判となり、住民の健康づくりや地域の指導者研修の場として利用されることが多くなっています。2月8日には南相木村の住民、13日には川上村の保健指導員の方々々が来学され、体力測定と食事診断を行いました。体力測定の主眼は「自分の体力を知る」こと、食事診断は「自分の日常の食事内容の栄養バランスを知る」ことにあり、運動と食事の両面から健康づくりに役立てていただけます。一方、サポートとして参加したスポーツ健康学科の学生にとっては、脚筋力測定器や持久性体力測定用自転車などの専門機器を扱い参加者とコミュニケーションを図るなかで、授業での学びを活用でき、また事前学習の良い機会となっています。参加者も学生に励まされ測定値のアップに挑みます。当日の体力測定や食事診断の結果と知識を地域に持ち帰り還元する取り組みも始まっているようです。



皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)がお手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。

平成28年度文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」

ICT活用推進事業、教育研究活性化設備整備事業が採択

今年度は、文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」において松本大学、松商短期大学部ともに教育の質的転換(タイプ1)、地域発展(タイプ2)が採択されました。加えて短期大学部のタイプ1において、事業を推進するために必要な設備費や整備費が補助される2つの取り組み(ICT活用推進事業、教育研究活性化設備整備事業)に申請し、ともに採択されました。



平成27年度採択 アクティブラーニング対応の机・椅子

私立大学等教育研究施設整備費補助 (ICT活用推進事業)

短大 タイプ1 「教育の質的転換」 **学修到達度の向上に向けた ICT教育環境の整備**

本学は、学生の系統的な学修を促すために、全学的に授業科目のナンバリングを運用するとともに、シラバスの適正性を確保するために、教務委員会が第三者としてのチェックを行っています。これらの取り組みを通じて、学生に対する学びのロードマップを全学的に共有した上で、ICTを活用した双方型授業の幅をさらに広げるため、講義棟の1号館、2号館の大規模教室、中規模教室計6教室に、デジタルコンテンツに対応したプロジェクターや映像制御装置を含む周辺機器を整備し、全学的に授業の質と教授法の向上を図り、学生の学修到達度を高めるために活用していきます。

私立大学等教育研究活性化設備整備事業

短大 タイプ1 「教育の質的転換」 **教育の質保証につながる 教学改革分析システムの構築**

これまで本学が実施してきた、アクティブラーニングの手法を用いた授業の推進と、授業外学修時間の増加による単位の実質化に向けた教学改革をさらに推し進めるため、ゼミナールで利用されている小規模教室4教室に授業の目的に合わせてレイアウトを自由に変更できる机・椅子、また全学生に貸与しているIT機器からもプレゼンテーションができるプロジェクターを導入します。さらに、アクティブラーニングの推進と授業外学修時間の増加を目的に行ってきた数々の取り組みの効果を測定し、その結果を今後の教育活動につなげるため分析システムを構築します。

部活動情報 Club・Circle

スキー部

フリースタイル・モーグルの杉本君 卒業後も企業で競技継続へ

今シーズン、本学スキー部に所属する杉本幸祐君(スポーツ健康学科4年)は、スキーのフリースタイル・モーグル競技の強化指定選手として



世界各地のW杯を転戦しました。12月10日のフィンランドに始まり、アメリカ、カナダで2戦、2018年にオリンピックが開催される韓国の平昌、そして2月18・19日の秋田たざわ湖大会までフル参戦しました。さらには、2月25・26日に札幌で開催されたアジア冬季競技大会にも、日本代表の一員として参加しました。

大学生活で残すは、3月25・26日にかけて富山県たいらスキー場で開催される全日本スキー選手権大会のみとなります。この大会には、後輩である藤井昌織君(スポーツ健康学科3年)も出場します。2人揃っての表彰台をめざし、是非とも“有終の美”を飾ってほしいと思



います。

なお、杉本君は本学を卒業後、内定先の株式会社デイリーはやし様の全面的なご理解とご支援をいただきながら、平昌・北京の両五輪を目指して競技を続けられることになりました。頑張れ、幸祐!!

(スキー部部長 齊藤 茂)

硬式野球部春季リーグ戦日程

※球場が変更になる場合があります。

節	月	日	曜	対戦相手	開始時間	会場
第2節	4	8	土	埼玉大学	10:00	山梨学院大学野球場
		9	日	埼玉大学	12:30	
第3節	4	15	土	茨城大学	11:30	山梨学院大学野球場
		16	日	茨城大学	9:00	
第4節	4	22	土	山梨学院大学	12:30	山梨学院大学野球場
		23	日	山梨学院大学	10:00	
第6節	5	6	土	新潟大学	10:00	山梨学院大学野球場
		7	日	新潟大学	12:30	
第7節	5	13	土	常盤大学	10:00	白鷲大学野球場
		14	日	常盤大学	12:30	



石巻での学習支援6年間に区切り

3月2・3日に、「松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト」による宮城県石巻市大街道小学校での最後の学習支援を無事に終え、6年間続けてきた活動が一区切りとなりました。ちょうど「6年生を送る会」があり、その場で子どもたちにお礼を述べ、活動の終わりを告げました。



震災直後に立ち上げた同プロジェクトは、石巻市を中心にボランティア活動を行ってきました。ここ数年は、復興庁の財源を活用して大街道小学校の児童を対象に学習支援と心のケアカウンセリング（指導は臨床心理士の古林康江先生）を主に実施していました。震災時1年生だった子ども

たちが小学校を卒業する頃までは関わりたいと思いながらの6年間でした。最前線で活動を支え続けた卒業生も含めた学生、また活動にご協力いただいた皆様からお礼を述べたいと思います。ありがとうございました。

（松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト 尻無浜 博幸）

就活2017スタート!

平成30年3月卒業予定者の就職活動がいよいよスタートしました。3月7日に本学で開催した合同企業説明会には公務・行政・企業・団体など70事業所にご参加いただき、それぞれのブースで学生たちが人事担当者の説明に熱心に耳を傾けていました。約3時間半に及ぶ説明会で、リクルートスーツ姿の学生は関心のあるブースを回り、緊張の面持ちで傾きながら聴いてメモを取る姿が見られました。



本学がビジネス文書技能検定で文部科学大臣賞受賞

松本大学では、社会に出てからすぐに役立つ実践的スキルを身につけるため、ビジネス系検定試験3種目（秘書技能検定・ビジネス文書技能検定・サービス接客実務検定）を実施し、毎年多数の合格者を出しています。この検定は、公益財団法人実務技能検定協会が主催し文部科学省の後援を受けて運営されています。

毎年、各検定試験より成績優秀な実施団体を選び、「文部科学大臣賞」および「実務技能検定協会団体優秀賞」が授与されていますが、本年度、松本大学はビジネス文書技能検定の種目において、全国312団体の中

から「文部科学大臣賞」に選ばれました。また、秘書技能検定の種目においても、受験者数も多く成績優秀であることから、全国1,975校の中から選ばれ感謝状をいただくことになりました。2月27日に松商短期大学の浜崎央経営情報学科長が賞状の贈呈を受けました。（情報センター課長 松尾 淳彦）



栄養教育ゼミの研究が最優秀賞に

乳の学術連合・一般社団法人「ミルク」が実施する「学生のための乳の研究活動支援事業」に本年度、健康栄養学科栄養教育ゼミの研究が採択され、助成をいただいて卒業研究を進めてきました。12月11日に東京で行なわれた同研究活動成果報告会で、4年生の坂詰麻由さんと櫻井恵莉さんが「高校硬式野球部選手を対象とした栄養サポートにおける牛乳・乳製品の活用」のテーマで発表しました。

その結果、この研究が「乳利用普及部門」で研究助成を得ていた全国3大学のなかの最

優秀賞に選ばれました。1年間取り組んできた研究がこのような形で認められたことは大変うれしく、またこの受賞が学生時代の誇れる体験になってくれればと願っています。

（健康栄養学科・教授 廣田 直子）



平成28年度学生ボランティア団体支援事業「松本大学◎いただきます!!プロジェクト」が採択



一般財団法人学生サポートセンターの平成28年度「学生ボランティア団体支援事業」に、「松本大学◎いただきます!!プロジェクト」が採択されました。このプロジェクトは地域づくり考房「ゆめ」で学生が地域住民とともに

地元食材を活用したヘルシーメニューの作成に取り組んできた歴史を持ち、現在は大学・短大の学生計17名が、松本市環境政策課の推進する食品ロス削減事業と連携して旬の食材をよりおいしく味わうレシピの考案などを行なっています。

第14回目となる同支援事業は「福祉」「環境」「地域連携」「国際交流」などに取り組む全国の学生団体が応募した中から57団体が採択され、表彰状と活動助成金が贈られました。（地域づくり考房「ゆめ」課長 日井 健司）

松本大学図書館公開講座を開催しました

12月18日、岡山県瀬戸内市民図書館の嶋田学館長をお招きし、「瀬戸内市の図書館づくり」と題して図書館公開講座を開催しました。10月に姜尚中さんをお招きした講座に続く、2回目の公開講座でした。

瀬戸内市民図書館は、2016年6月に開館した新図書館で、嶋田館長の豊かな経験や理論を随所に取り入れ、全国から注目されている図書館です。当日は、学外からも20名ほどの参加があり、関心の高さをうかがわれました。



今、全国の公共図書館や大学図書館において、地域や大学を支援する役割を担える図書館をつくらうという取り組みが進められています。出席した50名余の本学学生も含め、今後の図書館や地域の在り方について考える機会となりました。

（図書館長 伊東 直登）

予想外の出来事

総合経営学科 教授 太田 勉

昨年は、世界を揺るがす予想外の出来事が相次いだ。AI(人工知能)が第3次ブームに沸くなかで、囲碁AI(アルファ碁)が世界トップ級の韓国プロ棋士を圧倒したことも、その一つである。囲碁はチェスや将棋に比べて盤面が広く、打つ手を網羅すると天文学的な数となるため、AIがプロ棋士に勝つのは10年以上先とみられていたからだ。しかし、コンピュータが人間の脳のように自ら学習する「ディープラーニング(深層学習)」という手法を採用することで、囲碁AIは予想外のスピードで強くなったようだ。

私は50年来の囲碁ファンで、囲碁AIの進

化に興味湧き、同僚に勧められて、インターネットで手軽に楽しめる囲碁ソフトと対戦を試みた。予想外の面白さで、子どもがゲームにはまるように、暇さえあれば囲碁ソフトと対戦する毎日となった。半年後、腕試しのつもりで、日本経済新聞に掲載されていた関西棋院(囲碁プロ棋士の団体)による「囲碁棋力認定」に応募してみた。検定料は無料で、3級～六段の棋力を公式認定するものであった。

2月中旬に送付されてきた採点結果は、予想外だった。何と「六段までを認定する」と記載されていた。自己評価をはるか上回る段位

認定で、囲碁ソフトとの連日わたる対戦の学習効果があったにしても出来過ぎである。

思わず頬が緩んだが、喜んでばかりもいられない。免状の申請・取得には、棋力に応じた免状料を寄附として納める必要がある。高段位になるにつれて免状料は急上昇し、六段の免状料は20万円余りと予想外の高額である。長年にわたる努力の証として、免状を取得する「絶好のチャンス」という気はする。その半面、問題が簡単で、寄附集めが主目的ではないかという疑念も残る。今回の免状申請有効期限は6カ月である。さてどうするか、頭を冷やしてよく考えたい。

Information

2017オープンキャンパス 【途中参加・途中退出可】

次の日程でオープンキャンパスを行います。
高校生はもちろん、保護者や教員の方もぜひご参加ください。

●松商短大【16フィールド体験ツアー】

[日時] 4/23(日) 10:30～15:30(受付10:00～)

[内容] 松商短大のフィールド体験、キャンパス見学ツアー、進路・入試・奨学金相談、保護者相談、ランチ無料体験 etc.

●松本大学・松商短大

[日時] 5/21(日) 6/25(日) 7/23(日) 8/6(日) 8/20(日) 9/24(日) 10:30～15:30(受付10:00～)

[内容] 松本大学・松商短大概要説明、学科説明、ミニ講義、体験講座、トレーニングルーム体験、ランチ無料体験、キャンパス見学ツアー、個別相談(入試・授業・資格・就職・学生なんでも相談) etc.

●特別授業公開(全学部・学科)

[日時] 10/9(祝)

[内容] 本学への理解を深めていただくために通常の授業を公開します。



無料シャトルバス運行

長野県内<松本駅、長野駅、上田駅、佐久平駅、岡谷駅、下諏訪駅、茅野駅、伊那(上伊那農業高校前)、飯田駅>・山梨県<甲府駅、小淵沢駅>、新潟県<新潟駅、高田駅>からシャトルバス運行 ※松本駅以外要予約

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200

新刊情報

「長寿のヒミツ —松川村はなぜ日本一なのか—」



観光ホスピタリティ学科・山根宏文教授は2009年から、松川村の資源を活かした観光振興を継続。その松川村が男性長寿日本一(2013年厚生労働省発表)となったことから、食習慣、ライフスタイルなどに関する訪問調査を実施し、健康栄養学科・廣田直子教授とともに結果をまとめた。長寿日本一の要因とは?

山根宏文・編著/創成社/A5版/238ページ

松本大学英語版サイト開設

松本大学では国際交流事業の活発化にともない、英語版公式サイトを新設しました。短期留学プログラムや留学生入試情報を発信するとともに、本学の取り組みを広く海外に訴求します。

URL: <https://www.matsumoto-u.ac.jp/en/>

通常の公式サイトでも教育・研究活動、地域連携活動、入試情報などさまざまな取り組みを随時更新しています。ぜひご覧ください。

編集後記

今年度は松本大学・松商短期大学部にとってどんな一年だったのだろうか。入試広報室にとっても教育学部の新設と県内の高等教育機関の動向を見ながらの学生募集、難しく厳しい一年だったとつくづく感じる。まだ2017年度の入学試験も終了しないうちから既に2018年度入学試験に向けての広報活動が始まっている。こうした緊迫した状況が我々の大きなモチベーションとなる。2017年春、新社会人となる卒業生諸君も早く将来の目標を掲げ自らに熱い火を点けてほしい。
(記・入試広報室長 中村 文重)

